

## 『却来華』の「力なく、五十に至らざれば」について

天野 文雄

二十一点を数える世阿弥の芸論研究は、周知のように、ほぼ半世紀前の刊行になる日本思想大系『世阿弥・禅竹』（昭和四十九年、岩波書店）が、表章氏による博搜された各伝本

理解に苦しむ世阿弥晩年の永享五年（一四三三）に著述された『却来華』の「力なく、五十に至らざれば」について考えてみたい。

をふまえた校訂本文の提示、それに立脚した本文の斬新な解釈と、優に論考という実質をもつ百八十におよぶ補注によって、金字塔ともいえる成果として知られている。以後、同書は世阿弥の芸論にかぎらず、能楽史研究、作品研究など能楽研究のあらゆる分野における「規範」となってきたのだが、もちろん、同書によって世阿弥の芸道思想のすべてが明らかにされたわけではない。どんなにすぐれた研究でも、それは後続の研究によって、発展させられ、あるいは訂正されるものであって、世阿弥の芸論研究もその例外ではない。現にそうした研究は現在までも少なからず出ているし、筆者も最近、『花鏡』などにみえる「人ない」や『金鳥書』の「春六月」について、ささやかな見解を開陳しているが、ここでは、やや

『却来華』はその前年に伊勢で客死した元雅に「口伝」として伝えていたことを記した短編の秘伝の集成で（口伝とは文字通り口伝で、実演以前の教えであろう）、その冒頭が「却来風」についての記事である。『却来華』という書名もそれに由来するはずだが、しかし、その「却来風」がどのような秘伝なのかは、「無上妙体の秘伝」とか「口外なき秘曲」というだけで、それ以上のことは記されていない。これに続いて、右左右と舞う舞い方、犬王が得意とした天女舞の来歴、駿河舞の書、白拍子が誕生したのが興福寺の維摩会であること、舞の本体は『翁』の舞であることが簡単に説かれたあと、「この一卷、これは元雅口伝の秘伝なり」とあるから、結局、「却来風」は『却来華』に記された他の秘伝と同様に、世阿弥が生前の元雅に口伝として伝えていたもの

で、その実体は今となっては不明としか言いようがないのだが、その冒頭の「却来風」について、世阿弥は次のように言っている。

そもそも、元雅、道の奥義を極めつくすといへども、ある秘曲一ヶ条をば、四十以前は外見あるまじき秘曲にて、口伝ばかりにて、その曲風をば現はさざりしなり。これは却来風とて、四十以後、一期に一度なす曲風なり。元雅は芸道ははや極めつくしたる位位なれども、力なく、五十に至らざれば、その態をなすことあるまじき秘伝にて、口伝ばかりにてありしなり。

つまり、「却来風」は四十以後に一度だけなす曲風なので、四十以前に亡くなった元雅には口伝でしか伝えていなかったというのだが、さきに「やや理解に苦しむ」としたのはこの「力なく、五十に至らざれば」である。元雅の享年はかつては四十歳未満、現在は三十代前半頃と考えられているから、ここは「五十に至らざれば」ではなく、「四十に至らざれば」とあるのが自然だろうし、この箇所文脈からも、ここは「四十に至らざれば」とあるのが自然である。たぶん多くの研究者もそう思っていると思われるが、とすれば、この「五十」は「四十」と書くべきところを世阿弥が書き誤ったか、あるいは後人の誤写かとも疑われるのだが、『却来華』のテキストは大正大地震で焼失した安田善次郎の松廼舎文庫本（江戸初期の写本）を底本にした明治四十二年の吉田

東伍編<sup>【吉野】</sup>世阿弥十六部集』所載の「吉日本」しか知られていないから、その点は現時点では確かめえない。

さて、そのような状況にある『却来華』のこの箇所について、これまでではどう考えられていたかだが、先述の『世阿弥・禅竹』では、頭注に、この「五十に至らざれば」を「四十以前」「四十以後」の前言と合わないとする。頭注という制約もあって、それ以上のことは述べられていないが、これは「五十」を「四十」の誤りとみたものであろうか。

一方、戦前の能勢朝次氏『世阿弥十六部集評釈(下)』(岩波書店)の「口訳」では、「元雅は既に芸道は極め尽した性位に達して居たのであるが、残念ながらまだ五十歳に達して居ないので」とし、「語釈」では、「ここに四十以後とあり、次に「五十に到らざれば、そのわざをなす事あるまじき秘伝」とあるのは、そこに十年の開きがあるが、五十以後は四十以後に包含せられるものであるから、実演は先づ五十歳以上と考へて良いものと思ふ」としている。これは「五十」を「四十」の誤りとはみず、「五十(五十以後)」を「却来風」を實際に演じる年齢とみて、四十に至らずに亡くなった元雅には、口伝として伝えてはいたが、それを舞台で示すことは叶わなかったという解釈である。小西甚一氏『世阿弥集』(昭和四十五年、筑摩書房)の口訳も同様で、これはそれなりに筋が通った解釈と言えるが、しかし、その前に「却来風とて、四十以後、一期に一

度なす曲風なり」とあるのだから、ここに突然、「五十に至らざれば」とあるのは、やはり唐突な印象は否めない。能勢氏が「そこに十年の開きがあるが」としているのもそれゆえだろう。

さて、仮にこれが誤字などでないならば、世阿弥がなぜここで「五十」という年齢を持ち出したのが問題になるが、そこで想起されるのが、『風姿花伝』第一年来稽古条々の「五十有余」が伝える観阿弥最後の舞台である。

周知のように、そこには五十二歳で亡くなる四日前に、駿河(静岡市)の浅間神社での法楽能において観阿弥がみせた舞台が、次のようにビビッドに回想されている。

亡父にて候ひし者は、五十二と申し五月十九日に死去せしが、その月の四日の日、駿河の浅間の御前にて法楽仕る。その日の申楽ことに花やかにて、見物の上下、一同に褒美せしなり。およそ、その頃、物数をばはや初心に譲りて、やすき所を少な少なと色えてせしかども、花はいやましに見えしなり。これ、まことに得たりし花なるがゆえに、能は枝葉も少なく、老木になるまで、花は散らで残りしなり。これ、眼のあたり老骨に残りし花の証拠なり。

これを書いた時の世阿弥は三十七、八歳だが、五十二歳だった観阿弥最後のこの舞台は、芸論の随所で亡父への敬慕の念を吐露している世阿弥には終生忘れられない光景であ

り、体験だったはずである。『却来華』で却来風は四十以後に一度なす曲風だと言ったあとに、「(元雅は)力なく(残念ながら)、五十に至らざれば」と「五十」という年齢を出したのは、この亡父五十二歳の最後の「老骨に残りし花の証拠」たる舞台の記憶が、ふと世阿弥によみがえったのではあるまいか。「五十に至らざれば」は、そう考えることで説明がつくと思うのだが、いかがであろうか。

いうまでもなく、『却来華』は世阿弥晩年の著述であり、『風姿花伝』第一の「年来稽古条々」を書いた頃の世阿弥には、却来風という芸道概念はなかったはずである。また、駿河浅間神社での舞台が世阿弥が晩年に到達した却来風にあたる曲風だったかどうか不明である。しかし、四十に至らずして却来風を見せることなくして亡くなった元雅について書いていた世阿弥は、ここで「せぬならでは手立てあるまじ」とされていた五十二という年齢で、「老骨に残りし花」をみせた亡父の舞台を思い出し、あれこそが却来風だと思ったのではないか、ということである。世阿弥は『却来華』の前年に執筆した『夢跡一紙』に、元雅を「祖父にも越えたる堪能」と哀惜しているが、それだけに元雅を失った世阿弥はなにかにつけて亡父観阿弥を思うことが多かったものと思われる。「五十に至らざれば」には、そういう世阿弥の亡父観阿弥と嫡男元雅への思いが交錯していると思われるのである。

(大阪大学名誉教授)